

組織行動研究

No. 27

編集後記

●今号のモノグラフ No. 39 は前号に引き続き、「研究人材マネジメント：そのキャリア・意識・業績」の続編として4編の論文を掲載した。寄稿者の1人、高尾尚二郎助教授は本年3月13日に急逝した。前途を嘱望されていた36歳の若さであった。その日 R & D 研究会のメンバー10人ほどで日立基礎研究所を訪問し、帰ろうとした時に高尾君逝去の報せに接したのだった。「組織文化特性の分析—組織変革の阻害要因としての組織文化—」は高尾君の助手を勤めていた仙田幸子さんと共同論文で、高尾尚二郎君の遺稿となった。

●R & D 研究会は今年度から研究人材マネジメントの国際比較研究を行うことになった。当面、インド、イギリス、ドイツ、アメリカの研究所の研究員の調査のプリテストに入ることにしている。また基礎研究と開発研究における研究マネジメントの比較調査も行う計画である。

●モノグラフ No. 40 は「対中国ビジネスの実証的研究」というテーマで、3編の論文を取めている。中国との関係は経済的にも政治・社会・文化的にも、21世紀の日本にとってきわめて重要であり、日本の将来の命運を左右すると言っても過言ではない。経営管理研究科で組織された「交渉研究プロジェクト」の中国調査チームの成果をここに掲載することにした。交渉研究プロジェクトは研究成果の上になつて、わが国ではめずらしい「交渉論」の授業を経営

管理研究科で近くスタートすることになっている。このモノグラフがわが国では乏しい交渉研究に一石を投ずることになれば幸いである。(石田)

●昨今、模倣改良型の研究開発から、ブレークスルー型の研究開発に移っていかなくてはならない、という議論が聞かれる。わが国大企業が新しい競争環境で生き残っていくためには、これまでのような既存技術の改良ではなくて、より新しい創造的な技術開発を進めていかなくては行けない、と言われる。だが、はたして模倣改良型の研究開発とブレークスルー型の研究開発をわけることが可能なのか。いや、もう少しいえば、はたしてブレークスルー型の研究開発を求めることは現実的なのか。

●例えば、昨年この編集後記を書くのに使ったノートパソコンが、使い過ぎだろう、全く動かなくなってしまったので、新しいのを買った。機能は数段の進歩である。CPUは3倍ほど速くなり、メモリーは大幅増加。CD-ROMリーダーが標準装備である。画面も広くて、見やすい。そして何よりも同じ程度の価格であった。

●だが、ここにみられるような技術の進歩は、はたしてブレークスルーなのか、それとも既存技術の改良なのか。もしかすると分けることは不可能で、また無理にわけけることは意味が無いのかもしれない。逆に、ブレークスルーとは、既存技術の改良が非常に速いスピードで行われ、またその改良の度合いも極めて大きいと考えるのが正しいのではないか。こう考えることのいい点は、そうするとこれまでの組織や人的資源管理と全く異なったシステムを考えるのではなく、既に持っているシステムをそれこそ改良して、技術改良のスピードと度合いをあげることに専念すればよくなるからである。

●意図したわけでないが、今年の『組織行動研究』に収められた企業内研究開発についての論文4点は、これまで組織行動論が何度か分析してきたテーマをとりあげ、それが研究者や研究組織の成果にどう結びつくかに調べるものである。高尾・仙田論文は組織文化について、蔡論文はリーダーシップについて、石川論文は研究者のローテーションについて、中原論文は企業間提携についてである。4本とも力作であり、秀作である。だが、全て伝統的なテーマを研究者・組織の成果と結び付けている。その意味で全くあたらしい組織パラダイムに基づいたものではない。

●でも、考えてしまうのである。なぜ、こうした技術の進歩に対して、社会システムの変化は遅々たるものなのか。世の中、規制緩和や市場原理の導入が叫ばれるが、これがどんなにうまくいっても、来年までに同じ価格で、3倍の効果をもたらす社会システムが作られるとは思えない。われわれ社会学者・行動科学者の世界は、企業の研究開発技術者の状況をすこしでも模倣する必要があるのかも知れない。この編集後記を書いているノートパソコンを開発してくれた技術者たちに感謝するとともに、彼らがなぜそんなにもすばらしい成果をあげられるのかを、これからも勉強していくことが必要だろう。

●こうした意味で、われわれと去年まで一緒に研究活動を行ってきた高尾尚二郎君を失ったことは大きな損失だった。今回の論文は、彼と仙田幸子さんが共同で執筆中だったもので、最後の整理は仙田さんをお願いした。それこそ組織行動研究分野でブレークスルーを期待されていた若い研究者の死である。悔やんでも悔やみきれない。残されたわれわれの責務は大きい。高尾君の冥福を祈ろう。(守島)

慶應義塾大学産業研究所行動科学研究モノグラフ

組織行動研究(第27号)

責任編集 石田英夫、守島基博

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 27
MARCH 1997

〒108 東京都港区三田2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所 印刷
電話 03-(3453)-4511 (大代表)
<平成9年3月28日>

〒169 東京都新宿区高田馬場3-8-8
株式会社国際文献印刷社
電話 03-(3362)-9741 (代表)
<平成9年3月21日>